

## まえがき

### ーなぜ音声と文法なのかー

グローバル化が進む現代社会において、英語教育に対する期待はこれまでにないほど大きくなっています。そのような状況下で、英語教員には高い英語力と指導力が求められています。文部科学省が2015年6月に発表した「生徒の英語力向上推進プラン」では、生徒の英語4技能が十分な水準に達していないという報告がなされ、これを向上させるために現在も諸々の取組みが進められています。その中には、英語教員の研修や、大学の教職課程におけるコアカリキュラムの開発が含まれています。2017年3月に文部科学省が提示したコアカリキュラムには、英語の音声と英文法に関する科目（「英語の音声の仕組み」「英語教育に関わる英文法」）の履修が含まれています。

本書では、学習者の4技能を十分な水準にまで高めるには、まず教員が文法を深く理解することが不可欠であると考えます。言語は暗号の体系のようなものです。文法を学び、暗号を解読してこそ、聞く・読む・話す（やり取り・発表）・書く、の4技能が可能になります。発展的な活動であるディスカッションやエッセイライティングにも十分に対応できるでしょう。文法の知識こそが、4技能とその先の技能を支える基盤であると言えます。ただし、文法の方が及ばない領域があります。それは発音です。文法的には完璧でも、英語らしい音声で発信できなければ相手に通じないかもしれません。文法と同じように、発音の仕組みは言語ごとに違っているため、特別に学ぶ必要があるのです。国際共通語としての英語の役割が増大している昨今、英語らしい発音、抑揚、リズムを知る重要性は増しています。このように、生徒の4技能を十分に高めるための教師の指導力を支えるのは、音声と文法の知識です。

以上のような考えから、本書では音声と文法のエッセンスを一冊にまとめるという、従来あまり見られなかった構成を取っています。Part I「発音」

では音声学のみでなく音韻論にも触れており、Part II「文法」では統語・意味論の観点から文法解説をする他に、文法以前の知識として語用論の知見を織り込んだり英語史を概観したりしています。全体として、プロの英語教員のための、現代英語学の入門書になっています。読者層としては英語教員の方々および英語教員を志望する大学生の方を念頭に置いています。広く英語に関心のある方に楽しんでもらえる内容になっていると思います。手元に置いて、どのページからでも読み進めていただきたいと願う次第です。

各章の概要としては、第1章と第2章で英語の子音と母音の発音の仕方を解説しました。第3章では2つ以上の音が連続する時に起きる微妙な音変化について述べ、第4章では、文など大きな単位を発音する時に留意すべき強勢、リズム、イントネーションについて解説しました。第5章では、音声学の知識を実践するために、英語の歌やドラマ、あるいはレシテーションを有効に活用する方法について提案しました。続く文法編では、第6章で文法以前に知っているべき知識について述べ、第7章で英文法の中核となる文型について解説しました。第8章～第11章では様々な品詞について、機能を中心に解説しました。最終章となる第12章では英語史の観点から、現代英語の特徴をいくつか選んで観察しました。また、本編のほかにコラムを4つ設けて、英語教員のための豆知識を提供しました。

以上、英語の what to teach のエッセンスを簡潔かつ網羅的に記述できたと思います。本書が英語教員の英語力と指導力の向上に役立ち、ひいてはすべての英語学習者の英語力の向上につながることを願ってやみません。

最後になりますが、発音モデルの作成ではピッツバーグ大学大学院生 Elizabeth Haley 氏の多大なるご協力を得ました。また、くろしお出版編集部 の池上達昭氏と荻原典子氏には刊行に至るまでのすべての過程で御世話になりました。改めて深く感謝申し上げます。

2021年9月 伊佐地恒久（監修）



# 目次

まえがき—なぜ音声と文法なのか— . . . . . iii


---

## Part I 発音

---

第1章	英語の子音 . . . . .	2
1.1	有声音と無声音 . . . . .	2
1.2	子音と母音 . . . . .	3
1.3	子音の種類 . . . . .	4
1.4	日本語に無い子音の発音方法 . . . . .	7
1.5	日本語にある子音の発音方法 . . . . .	9
第2章	英語の母音 . . . . .	12
2.1	手本の1つとしての標準アメリカ英語 . . . . .	12
2.2	母音の種類 . . . . .	13
2.3	二重母音 . . . . .	16
2.4	日本語の母音との比較 . . . . .	17
第3章	音変化 . . . . .	20
3.1	音素と異音 . . . . .	20
3.2	同化 . . . . .	26

3.3 連結	29
--------	----

 <b>コラム1</b> よくある音と珍しい音—音韻対立の普遍性と階層性—	31
--	----

## 第4章 強勢とリズムとイントネーション

4.1 強勢	34
4.2 リズム	46
4.3 イントネーション	50

## 第5章 音声学—理論から実践へ—

5.1 モチベーションの向上	61
5.2 教材として使える英語の歌	62
5.3 リズムの習得に適した曲	68
5.4 海外ドラマを使ったイントネーションの習得	72
5.5 発音を総合的に鍛えるレシテーション	77


---

## Part II 文法

---

## 第6章 文法以前の知識


6.1 情報構造の原則と文法	80
6.2 話者と主語	84
6.3 レベルの分離—音素・形態素・語・句・節・文—	85
6.4 語用論	88

<b>第7章 文の構造</b> .....	96
7.1 文型－「SVO±1」の体系－ .....	96
7.2 文要素と修飾語 .....	102
7.3 特殊構文と文型 .....	105
<b>第8章 名詞と動詞</b> .....	109
8.1 名詞の体系 .....	109
8.2 動詞の機能 .....	114
8.3 普通名詞と動態動詞の共通点 .....	125
8.4 動詞からの派生形 .....	126
 <b>コラム2 willとbe going toとbe -ing</b> .....	129
<b>第9章 形容詞と副詞</b> .....	132
9.1 形容詞の機能 .....	132
9.2 形容詞の順序 .....	135
9.3 副詞の機能 .....	137
9.4 副詞の位置 .....	140
<b>第10章 代名詞と法助動詞</b> .....	142
10.1 代名詞の種類 .....	142
10.2 直示と照応 .....	144
10.3 法助動詞の用法 .....	148
<b>第11章 冠詞と前置詞</b> .....	157
11.1 冠詞の用法 .....	157

11.2	前置詞の用法	160
11.3	空間での「あの感じ」	162
11.4	句動詞	168

## 第12章 歴史的に見た現代英語

12.1	歴史的経緯	174
12.2	SVO文型	182
12.3	進行形	186
12.4	使役構文	190

	コラム3 英語の復権が招いたこと—フランス語の流入と大母音推移—	195
---	----------------------------------	-----

	コラム4 世界の英語	198
---	------------	-----

	参考文献	203
	索引	206

Part 1で使用する音声については、実際の発音がわかるようにウェブサイト上に情報を掲載します。本書に関する情報も含めて次のサイトをご活用ください。

[https://www.9640.jp/books\\_862/](https://www.9640.jp/books_862/)



# 第1章 英語の子音

この章では、はじめに英語の発音を知るにあたって基本となる概念（有声音と無声音、母音と子音）を説明します。次に英語の子音について日本語と比較しながら解説します。私たち英語学習者が新たに学ばなければならない子音は何なのか、正確に発音するためにはどうすればいいのか述べます。

## 1.1 有声音と無声音

私たちの発する言語音はすべて、**有声音**と**無声音**に分けられます。喉に手を当てて *zzzzz* と発音すると、喉が携帯電話のバイブレーションのように震えます。これは、**声帯**という、喉にある発声するための器官が狭められて、肺からの空気が声帯を振動させて出ているからです。この時生じる音を**有声音**と言います。一方、喉に手を当てて *sssss* と発音しても喉は震えません。これは、声帯が大きく開かれており、肺からの空気が声帯の振動を伴わずに出ているからです。この時生じる音を**無声音**と言います。

有声音 = 声帯が振動する音

無声音 = 声帯が振動しない音

## 第2章 英語の母音

この章では、はじめに英語の母音の種類と特徴を述べた後に、それぞれの母音の発音方法を解説します。母音は、口の中でどのように調音されているのか、視覚的に確認しにくいのですが、日本語の母音と比べながら学べば、イメージしやすいです。モデルとなる音を何度も聞き、何度も口真似することで感覚を掴みましょう。

### 2.1 手本の1つとしての標準アメリカ英語

前章で見たように、**母音**とは、呼気が喉から唇までの間を全く妨害なしで通過した音のことです。日本語の母音は、/a/、/i/、/u/、/e/、/o/の5つなのに、英語の母音は単母音だけでもその2倍ほどあります。さらに、stayの/ei/など、同じ音節内にある連続した2つの母音、いわゆる二重母音を含めれば、その数はさらに増えます。私たち日本人が英語を話す際に、英語の母音すべてを日本語の母音で補おうとすると、ネイティブの発音とはかけ離れた「日本語っぽい」英語になってしまいます。

ところで、何をもち「ネイティブの発音」とするのは難しいところです。英語は、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アイルランド等、多くの地域で母語として話されています。しかし、日本の小学校・中学校・高等学校で使用される教科書に付随するオー

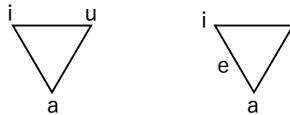


## よくある音と珍しい音

### —音韻対立の普遍性と階層性—

ここまでで、日本語に比べて英語は音素の数が多いことを見ました（第1章、第2章）。これらの音素の中のいくつかは普遍的で、どんな人間言語にも見られます。ロシア出身の言語学者ヤコブソン（Roman Jakobson）は、世界の数多くの言語を観察し、子どもの母語獲得の過程を観察し、失語症患者の言語喪失の過程を観察して、①普遍的な音素が存在する、②音素間に階層性が存在する、と結論しました。ヤコブソンによれば、子どもは次の順で母語の音素を獲得していきます。

1. まず、母音と子音の対立を獲得する。  
母音は /a/ であり、子音は両唇音である。
2. 次の段階として、子音が鼻音と口腔音に分かれる。  
(/mama/ と /papa/ ができる)
3. 次に、子音が両唇音と歯茎音に分かれる。  
(/mama/ と /nana/, /papa/ と /tata/)
4. その次に、母音が /a/ と /i/ に分かれる。
5. 次に、/a/, /i/, /u/ の「基本三角形」、  
または、言語によっては /a/, /i/, /e/ の  
「直線的母音体系」を獲得する。



この1～5までで登場した音素は普遍的で、どんな言語にも見られます。よく見ると、普遍的な子音は閉鎖音が中心で、しかも調音の場所が前方です（鼻音 /m/ と /n/ も口腔の前方を閉鎖して調音します）。それに、口腔音は無声音ばかりです。ただし、実際には、赤ちゃんは初めのうちは [baba]、[dada] と有声音を発します。この点についてヤコブソンは明言していませんが、「有聲の母音」には「無

## 第6章 文法以前の知識

この章では、英文法を理解するにあたって文法以前に知っているべきことについて述べます。それは理に適った発話を行うために必要な論理的思考法（6.1～6.3）であったり、人と人の円滑なコミュニケーションのために必要な社会の規則（6.4）であったり、英語と限らず日本語で考えたり話したりする時にも不可欠な知識です。

### 6.1 情報構造の原則と文法

英語の文を習う時はたいてい最初に、I'm Susan Baker、I'm Eri Saito、I'm Mike Smithなど、自分の名前を言う文を習います。このように、多くの教科書がI（私）を主語にしたI'm ... の文で始めるのには何か理由があるのでしょうか。文法の観点から見ると、これらは第2文型すなわちSVC文型にあたります。なぜ第1文型でなく第2文型から始めるのか、不思議ではないでしょうか。

#### ● 情報構造

これらの疑問に答えるために、**情報構造**という原則について説明します。情報構造は、「トピック・コメント構造を守れ」「トピックを文頭に置くべし」という原則です。言い換えれば「既知のことについて未知のことを述べ

# 第7章 文の構造

これ以降は英文法の体系に的を絞って述べます。先に6.1で、情報構造で言うところのトピックを文頭に置いたI'm Susan Bakerなどは文法的にはSVC文型であることを見ました。これを受けて、この第7章では文型およびその他の構文について解説します。

## 7.1 文型—「SVO ± 1」の体系—

私たちが学校で学ぶ英文法は、19世紀にイギリスで体系化された**伝統文法**を基にしています。それ以前に本格的な英語の文法書はなく、言語学者たちはラテン語の文法を参考にして英語の文法を記述しました。それが伝統文法です。方法論としては厳密さに欠けますが、実際には役に立ちました。伝統文法は新たな知見を取り入れながら現代に引き継がれて、英語学の研究法の1つになっています。

### ● 7 文型説

**文型**<sup>1</sup>について見ると、従来の伝統文法が5文型を提唱していたため、今でも学校の教科書は一般的に5文型説をとっていますが、現代の英語学で

<sup>1</sup> 本書では、諸々の構文のうち特に頻繁に用いられるものを慣例に従って「文型」と呼びますが、構文と文型の境界は曖昧で、すべてを「構文」で統一することも可能です。